

『綴方生活』誌における「表現」概念の位相

茨城大学教育学部 大内 善一

キーワード：表現、『綴方生活』，リアリズム綴り方教育論，文章表現技術，綴り方教師解消論

1. 本研究の目的

本研究は大内がこれまで取り組んできた昭和綴り方・作文教育史研究の一環である。大内はこれまで昭和期の綴り方・作文教育を通史的に辿りながら、そこに出現してきた教育内容論に関わる「内容か形式か」という二元論的な対立の図式について考察を巡らしてきた。大内自身のこの方面に関する研究史については第101回の本学会における「菊池知勇綴り方教育論における生活と表現の一元化への志向」

(大会発表要旨集)及び拙稿「菊池知勇綴り方教育論における『生活』と『表現』の一元化への志向」

(『茨城大学教育学部研究紀要・教育科学』第52号,平成15年3月)に記しておいたのでここでは省略に従う。また、大内以外によるこの方面に関する研究史については第104回の本学会における大内の発表「綴り方・作文教育論における『生活』と『表現』の一元化に関する先行研究」(大会発表要旨集)に記しておいたので省略に従う。

今回は昭和戦前期における綴り方教育運動に目を向けて考察を加えていく。前々回は『実践国語教育』誌を取り上げたが、今回は小砂丘忠義が主幹を務めた『綴方生活』誌における綴り方教育論に対象を据えてそこに見られる「表現」概念の位相に関して考察を加えていくことにした。

2. 『綴方生活』誌の性格

『綴方生活』誌は昭和4年10月に文園社(編集人・志垣寛)から創刊され、翌5年10月「第2次同人宣言」を発表して郷土社(編集兼発行人・小砂丘忠義)発行となり、小砂丘の死去に伴い昭和12年12月に「小砂丘忠義追悼号」を発刊して終刊となった。今回はこの期間における『綴方生活』誌に現れた綴り方教育論を考察の対象とする。

『綴方生活』誌については中内敏夫著『生活綴方成立史研究』(昭和45年11月,明治図書),滑川道夫著『日本作文綴方教育史3・昭和篇I』(昭和58年2月,国土社),太郎良信著『生活綴方教育史の研究』

(平成2年9月,教育史料出版会)等における詳細な考察が見られる。

第1次『綴方生活』誌は大正14年から刊行されていた子ども向け雑誌『鑑賞文選』(学年別尋常科6冊,高等科1冊,文園社)の教師用親雑誌として志垣寛を編集人として創刊された。創刊時の編集同人には小砂丘忠義,上田庄三郎,野村芳兵衛,門脇英鎮,峰地光重,小林かねよ,今井誉次郎,中島菊夫らがいた。創刊号の巻頭では「吾等の使命」と題して「教育に於ける『生活』の重要性を主張」し「生活重視は実に吾等のスローガンである」(草案執筆者・上田庄三郎)と宣言して子どもの生活解放を主張していく。

前述のように『綴方生活』誌は昭和5年10月号より志垣寛の文園社から独立した郷土社から刊行されることになる。経営・編集の中心は小砂丘忠義の手に移る。この号の巻頭では「社会の生きた問題,子供達の日々の生活事実,それをじつと観察して,生活に生きて働く原則を吾も掴み,子供達にも掴ませる。本当な自治生活の樹立,それこそ生活教育の理想であり又方法である」とし、「吾々同人は,綴方が生活教育の中心教科であることを信じ,共感の士と共に綴方教育を中心として,生活教育の原則とその方法とを創造せんと意企する者である」と宣言している。なお,この宣言の中の「綴方が生活教育の中心教科である」とする考え方を巡っては,当時の同人の間でも理解が一致していなかったことが後年,同人の一人であった峰地光重の証言等から明らかにされている。滑川道夫はこの問題に関して,その中に①「教科としての『国語科・綴方』と全生活教育とのかかわりの問題」,②「のちの生活教育論争に展開する萌芽をもふくみ,教科から『はみ出す』問題」(『日本作文綴方教育史3』,540頁)が孕まれていたことを指摘している。

以上に見てきたところから,『綴方生活』誌が子どもの「生活事実」を重視し「社会の生きた問題」「生活に生きて働く原則」に力点を置いて「綴方が

生活教育の中心教科」であるとする方針の下で活動していたと見なすことができよう。とは言え、本誌においても綴り方教育における「表現指導」の在り方が全く論じられなかったわけではない。当初はやはり「生活教育」に関わる言説が圧倒的に多かったのであるが、次第に綴り方の「題材」とその「表し方」との関わりを巡って「生活」と「表現」との関わりについての言説が出現してくる。以下、本誌でのこうした状況に焦点を絞りながら、本誌における「表現」概念の位相を探っていくことにする。

3. 第1次『綴方生活』(昭和4年10月～昭和5年8月)における「表現」概念の位相

第1次『綴方生活』の時期は創刊号の巻頭言「吾等の使命」に直言されているように専ら綴り方教育における「生活」の重要性を云々する言説が圧倒的に多い。しかし、そうした中でも綴り方教育における「表現」の問題に言及している論考が若干見られる点に注目しておきたい。

まず創刊号の巻頭論文において千葉春雄は「児童文のもつ研究問題的意味について」と題して「指導をあやまると、一年といふ幼児でありながら、言葉も用語も、形式的にのみひびいて、心の伴はぬ文がほめられるやうになつてくる」(10頁)と述べて、児童文に見られる表現の在り方に関わる研究問題を指摘している。また、同号における座談会「綴方の母胎としての児童の生活」の中で上田庄三郎は「生活の解放に異論はないが、僕は作品は生活そのまゝの表現でなくつてもいゝと思ふ」とし「一般に綴方教育を論ずるものが、作品と生活とをあまりに直接的に考へすぎる傾がありはしまいか」と述べて「僕は生活をあまりに綴方の母胎視すぎる考へからも、解放されたいと思ふ」、「作品は決して生活の直接表現ではない」(53頁)と論じている。要するに上田は「生活のくりかへしや再現だけなら、別に書く必要はない」と言うのである。「生活」と「表現」との関わりについての本質的な考え方として注目させられる。

第2号では「綴方の素材とその表現」と題した座談会が持たれている。綴り方の「素材」と「題材」との違いに関する考察と関わらせる形で「表現」の内実に関する議論が行われている。不十分な内容ではあったが、「表現とは言葉での生活」(65頁)であるとか「表現指導が先か？」(67頁)といった議論

も展開されていて興味深い。

第5号(昭和5年2月号)の中で木村文助は「綴方座談会所感」と題して創刊号以来続けられてきた誌上座談会に寄せた所感を述べている。その中で木村は「生活と表現」の関係に触れて「生活と、その表現との関係については生活即表現表現即生活と一元に見る人もあり綴方と其の母胎たる生活と、前後二元に見る人もある」と述べ、違いは両者の関係を「時間的に見るか空間的に見るか」にあるのではないかと主張している。「生活の意味」を「人間生活の全部を覆ふものとして、文材決定の心的状態からせば二元的に考へざるを得ないし、決定が先天的趣向のものとなせば一元の考方しかあり得ない要するに見方の相違であらうと思ふ」(36頁)というのである。

昭和5年3月に刊行された『綴方生活』増刊号では「新興綴方教育講話」が特集された。昭和4年12月に東京神田駿河台・国民中学講堂で五日間にわたって開催された「新綴方研究講習大会」の記録集である。この講習会には佐々木秀一・奥野庄太郎・五味義武・千葉春雄・北原白秋・志垣寛等の錚々たる講師陣が参加している。その内容にも「表現」概念に関わって注目すべきものが見られる。この講習会で千葉春雄は「言葉・心・学習」と題して、「綴方で一番重要な問題」は「今日の綴方界が、その指導者と云はず指導されて居る子供と云はず或は作品と云はず、凡てに通じて、表現に対する理解を欠いて居ることである」と指摘して、綴り方実践において「形式内容」一元論の主張と一致しない実態が見られるのは「表現そのものゝ理解が未熟なために起るものである」(81～82頁)と断じている。その上で千葉は「素材と作者と題材」の三者の関係について論じ、「素性のよい文」という言い方で綴り方における形式・内容一元論を展開している。

第2巻第6号(昭和5年5月)では「表現の指導」という論考が掲載されている。この論考では、「表現の指導がほんの手先の仕事に終つてゐること」に対して批判を加えて「表現の指導即生活の指導」(42～45頁)について論じている。

4. 第2次『綴方生活』(昭和5年10月～昭和12年12月)における「表現」概念の位相

第2次『綴方生活』は前述したように志垣寛の文園社から離脱して経営・編集の中心が小砂丘忠義に移ってから次第に従来の文芸主義的綴り方教育への

批判が行われ、「社会性」や「階級性」といった話題が取り上げられるようになり、綴り方における「プロレタリア教育」論（上田庄三郎「偶像崩壊覚え書き」昭和5年10月、江馬泰「階級層の上に立つ綴方」昭和5年11月）指向が強まっていく。

この頃の特集を見ると「作業主義と綴方」（昭和6年6月）、「綴方における共同制作」（昭和6年7月）、「共同制作の実際研究」（昭和6年8月）等が続いている。

（1）リアリズム綴り方教育論の台頭

昭和9年1月に入ると『綴方生活』誌上にリアリズム綴り方教育論が登場する。これは「赤い鳥」綴り方教育論における「ありのままに描く」という主張に対する批判的な主張として登場している。

今井誉次郎は「綴方リアリズムの諸問題」と題して「あつたこと一即ち自己の経験を真実に描く為めには、描く際の作者の頭に於て真実の創造がなされなければならない」とし「リアリズムは、外面描写でもなければ、単なる行動の記述でもない」と述べて、「自己の周囲に対して、今少し積極的に人生的社会的な眼を向け」（10頁）ることの必要を訴えている。

昭和9年5月には木村不二男が「児童文に於けるリアリティ」を、同年6月には村山俊太郎が「児童詩におけるリアリズムの問題」、そして同年7月には「調べた綴り方の進路—綴方的リアリズムの道へ—」と題した論考を発表している。

昭和10年3月には今井誉次郎が「リアリズム綴方序論」と題して「新リアリズムに於ては事実を包括的傍観的に描写するのではなくて、寧ろ事実を自己の生活的社会的悩みの眼によつて偶然的なもの本質的なものとに分けて本質的なものを描こうとする」（104頁）ものであると論じている。また同誌面において小川隆太郎は「リアリズム綴方への理解と作品批判の眼」と題して「調べた綴方」批判を行いながら、「調べることはどこまでも本質目的ではない」として「事実を具体的、批判的に書かうとすれば調べることも亦必要となってくる」（112頁）ものであると主張している。

（2）表現技術指導への転換

昭和9年11月の『綴方生活』に加藤周四郎の「歩いて来た道の自己批判—村での第一歩の綴方生活—」と題した論考が掲載されている。この中で加藤はこれまで「生活と表現を二元的に考へて来た」こ

とを反省し「対象された現実が如何にして表現作用に結ばれて行くかの理論が指導語の中に欠けてゐた」と自己批判をしている。

昭和10年3月に小砂丘忠義は田川貞二の論考「本格的綴方の解明」に対する考察を加えた「時宜を得たる警告的提言」という論考を執筆している。この中で小砂丘は田川が論じた綴り方の「題材的方面」と「表現的方面」の両者の関わりについて、「題材となつた時にはすでに表現がくつついてゐる」し、「表現を予想しないで題材は成り立たぬ」とも述べて「表現が先行するからこそ、数多くの素材がある一人特定の題材となるのである」と指摘している。そして、「題材を論ずることは同時に表現を、表現を論ずることは同時に題材を論ずることである」（125頁）と主張している。ここには綴り方における「題材」であるところの「生活」と「表現」とを一元的に見る考え方が窺えて注目させられる。

昭和11年8月には上田庄三郎の「綴方科学のために」という論考が掲載されている。上田は「綴方教育の科学的研究のためには、まづ綴方、文章の科学的研究が必要である」と述べて「文章とは、人間の精神構造の社会的表現であるから、人間の精神構造の科学によつて文章の科学的研究が深められることは当然である」（17頁）と指摘している。これは当時、波多野完治が発表した「文章の心理学的研究」である『文章心理学』に影響を受けた考え方である。

昭和11年11月には今井誉次郎の「綴り方形式の歴史性」という論考において興味深い提言がなされている。今井は「綴方は表現の教科」であると言うのである。今井は「過去の綴方教育をふり返つて見ても、所謂随意選題以後のもろもろの生活指導の綴方に於て主として論ぜられたことはその生活内容に就いてあつた」とし「表現の問題（言葉の問題）は、如何にそれが内容に忠実であるかといふ点からのみ論ぜられた」と述べる。「内容を重んずることの切なる為、それを表現する言葉の問題にまで波及したのだつた」（48頁）と指摘したのである。今井のこの考え方にはかつての今井自身による綴り方の「プロレタリア教育論」のような威勢の良い論調は窺えない。今井はこの論考で従来の「綴方教育」が「綴り方でなくて、何を綴らせるかだつた」としてその「内容主義」的偏向を批判している。また今井は、「今日迄行はれて来てゐる所謂綴方の生活指導なるものは、他の諸教科の教授に於てなされなけれ

ばならないものである」とし「以前の調べた綴方に於ける例へば『買物のノート』のやうなものは、当然算術教授に於てなされなければならない事項である」(48～49頁)とも述べている。

(3)「綴方教師解消論」による綴り方教育の目的に関する見直し

昭和12年1月には国分一太郎が『綴方教師としての悩み』について」と題した論考を書いている。国分は「綴方教師としてなんかは、綴方にとって必要にして十分な悩みだけ悩んだ方がいゝのです」とし「他の教科の事までも、一般社会の情勢のことまでも、国際関係のことまでも悩む必要はないと考へます」と述べている。国分の述べようとしていることは、要するに綴り方では「文字といふ道具を使つて思想や感情を、他人にわかるやうにかく」という立場からだけ腐心して、「その思想や感情の内容そのものについての悩みや、その悩みのよつてくる根本的なものについての悩みなどは、生活教育全般の悩みとしか、あるひは躍進日本国民の悩みとして、気永に忠実に、万機公論風に、多くの人々と悩みを共にしたい」(112頁)ということであった。国分は綴り方教師の責務を「明ラカニ思想ヲ表彰スルノ能ヲ養ヒ」であるとし「文字表現を正しく、明確にさせること」(113頁)であるとして、綴り方教師としての役割分担を思い切って限定するという考え方を主張したのである。そして国分は、綴り方において「何をかくか」という表現の前の「生活し方」や「生活の考へ方」の問題については「一応綴方ときりはなして、生活指導、教育全般の問題として、大所高所から考へていき、悩んでいくことが、有効適切である」(117頁)とまで主張したのである。国分のこうした考え方は、一人の生活綴り方教師による綴り方教育目的論としてもまた生活綴り方教育論における「表現」概念の位相という面からも極めて興味深い内容を含んでいる。

国分一太郎による上記の考え方は当時の、綴り方教師が生活教師に解消されるとする「綴り方教師解消論」に位置付けられる。国分によるこうした考え方に一部は重なり、一部は微妙に異なる考え方を示した論考に同時期(昭和12年1月)に掲載された村山俊太郎による「綴方理論の実践的展開」という論考がある。村山は「いまの綴方教師は、教育における生活指導が綴方だけでやれるものだなどといふ教科主義的な思ひあがりを精算して、じつくりと教師

の足場を現実の具体的事実の上に密着させた、生活教育の実践に乗り出してゐる」として、当時の現状を前向きに肯定している。その上で前年の11月号に今井誉次郎が執筆した「綴り方形式の歴史性」に対して批判的な考察を加えている。村山は今井の、綴り方の本質を「綴り方」にあるとし「綴り方の技術の教授」(131頁)を根本とする教科であるとする考え方に異論はないと述べた上で若干の批判的な考察を加え、「綴方科の特殊の任務である『ことば』の生活的な支配といふ立場を通すところに、綴り方教師の実践的任務がある」(135頁)と結論付けている。

昭和12年5月の『綴り方生活』に掲載された菅野門之助による「綴り方生活の反省から」という論考もこれまで見てきた当時の生活綴り方教育を巡る状況を象徴的に表している。菅野は「私は綴り方教育の最低の限度はどこにあるか迷っています」とし「自分の書きたい心や考やを、正しい日本語でありのままに書く技術は、日本人の一人残らずが獲得せねばならぬものであらうと考へるのです」と述べて、「綴り方技術の最低量を見究める必要があると思います」と訴えている。この教師の場合にも明確に綴り方教師解消論の立場を採って文章表現技術の指導に綴り方教育の軸足を移すべき事を訴えていることが見て取れる。

昭和12年6月には村山俊太郎の「ここから出発する一尋五の表現を高めるために」と題した論考が掲載されている。村山は「綴り方を、綴り方だけで向上させようとする、綴り方孤立観をすてよう」とし「子供の学校生活内において表現を必要とする生活組織をまづ考へて「その組織を中軸としてすべての表現生活が有機的に体系立てられなければならない」(13頁)と主張している。村山は、私たちが言葉を「単なる思想表現のための道具だつたり(「言語は技術である」)ことばが生産の手段だつたりするものでなく、それと共に私たちはことばによつて社会や自然を認識する」と述べる。そして私たちが「この言語の本質観に立つて、綴り方の仕事が単なる生活技術(実用主義をも含む)のためのものであるといふような狭い考へをすてて、より深い生活(社会や自然を含む外界一般と考へて)を認識するためにも役立つ意義をもつてゐることを考へる」(19頁)と論述している。ここにも『綴り方生活』誌における「表現」概念の位相の一端を窺うことができよう。